

霰ふる

泉鏡花作

一

若いのと、少し年の上なると・・・  
此の二人の婦人は、民也のためには宿世からの縁  
と見える。ふとした時、思ひも懸けない處へ、夢の  
やうに姿を露はす。――こゝで、夢のやうに、と  
云ふものゝ、實際は其が夢だつた事もないではない。  
けれども、夢の方は、又・・・と思ふだけで、  
取り留めもなく、すぐに陽炎の亂るゝ如く、記憶の  
裡から亂れて行く。

しかし目前、歴然と其の二人を見たのは、何時に  
成つても忘れぬ。峰を視めて、山の端に亘んだ時も  
あり、岸づたひに川船に乗つて船頭もなしに流れて  
行くのを見たり、揃つて、すつと抜けて、二人が床  
の間の柱から出て来た事もある。

民也は九ツ・・・十歳ばかりの時に、はじめ

て知つて、三十を越すまでに、四度か五度は確に逢つた。

これだと、随分中絶えして、久しいやうではあるけれども、自分には、然までたまさかのやうには思へぬ。人は我が身體の一部分を、何年にも見ないで澄ます場合が多いから・・・姿見に向はなければ、顔にも逢はないと同一かも知れぬ。

で、見なくつても、逢はないでも、忘れもせねば思出すまでもなく、何時も身に着いて居ると同様に、二個、二人の姿も亦、十年見なからうが、逢はなからうが、そんなに間を隔てたとは考へない。

が、つい近くは、近く、一昔前は矢張り前、道理に於て年を隔てない筈はないから、十から三十までとしても、其の間は言はずとも二十年経つのに、最初建つた時から幾歳を経て、婦人二人は何時も違はぬ、顔容に年を取らず、些とも變らず、同一である。

水になり、空になり、面影は宿つても、虹のやうに、すつと映つて、忽ち消えて行く姿であるから、確と取留めた事はないが――何時でも二人連の――其の一人は、年紀の頃、どんな場合にも二十四五の上は出ない……一人は十八九で、此の少い方は、ふつくりして、引緊つた肉づきの可い中背で、……年上の方は、すらりとして、細いほど瘠せて居る。

其の背の高いのは、極めて、品の可い艶やかな鬚で顯れる。少いのは時々髪が違ふ、銀杏返しの時もあつた、高島田の時もあつた、三韜と云ふのに結つても居た。

其のかはり、衣服は年上の方が、紋着だつたり、お召だつたり、時にはしどけない伊達巻の寝着姿と變るのに、若いのは、吃と縮ものに定つて、帯をきちんとめて居る。

二人とも色が白い。

が、少い方は、ほんのりして、もう一人のは沈ん

で見える。

其の人柄、風采、姉妹ともつかず、主従でもなし、  
親しい中の友達とも見え、従姉妹でもないらしい。  
と思ふばかりで、何故と云ふ次第は民也にも説明  
は出来ぬと云ふ。――何にしる、遁れられない間  
と見えた。孰方が乳母の兒で、乳姉妹。其とも嫂と  
弟嫁か、敵同士か、いづれ二重の幻影である。

時に、民也が、はじめて其の姿を見たのは、揃つ  
て二階からすら／＼と降りる所。

で、彼が九ツか十の年、其の日は、小學校の友達  
と二人で見た。

霰の降つた夜更の事

山國の山を、町へ掛けて、戸外の夜の色は、部屋の裡からよく知れる。雲は暗からう・・・水はもの凄く白からう・・・空の所々に颯と薬研のやうなひびが入つて、霰は其の中から、銀河の珠を砕くが如く迸る。

ハタと止めば、其の空の破れた處へ、むら／＼と又一重冷い雲が累りかゝつて、薄墨色に縫合はせる、と風さへ、そよとのもの音も、蜜蛸を以て固く封じた如く、乾坤寂と成る。・・・

建着の悪い戸、障子、雨戸も、カタリとも響かず。鼯が覗くやうな、鼠が匍匐つたやうな、切つて埋めた菱の實が、ト、べつかつこをして、ペろりと黒い舌を吐くやうな、いや、念の入つた、雑多な隙間、破れ穴が、寒さにきり／＼と齒を嚙んで、呼吸を詰めて、うむと堪へて凍着くが、古家の煤にむせると、時々遣切れなく成つて、潜めた嚏、ハツと噴出しさうで不氣味な眞夜中。

板戸一つが直ぐ町の、店の八疊、古疊の眞中に机を置いて封向ひに、洋燈に額を突合はせた、友達と二人で、其の國の地誌略と云ふ、學校の教科書を讀んで居た。――其頃、風をなして行はれた試験間に徹夜の勉強、終夜と稱へて、氣の合つた同志が夜あかしの演習をする、なまけものゝ節季仕事と云ふのである。

一枚……二枚、と兩方で、ペイジを遣つ、取つして、眠氣ざましに聲を出して讀んで居たが、恚う夜が更けて、可恐しく陰氣に閉されると、低い聲さへ、びり／＼と氷を削るやうに唇へきしんで響いた。

常さんと云ふお友達が、讀み掛けたのを、フツと留めて、

「民さん。」

と呼ぶ、……本を讀んでたとは、からりと調子が變つて、引入れられさうに滅入つて聞えた。

「……何、」

ト、一つ一つ、自分の睫が、紙の上へばら／＼と溢れた、本の、片假名まじりに落葉する、山だの、谷だのを其まゝの字を、熟と相手に讀ませて、傍目も觸らず視て居たのが。

呼ばれて目を上げると、笠は破れて、紙を被せて、黄色に燻つてほやの上へ、眉の優しい額を見せた、頬のあたりが、ぼつと白く、朧夜に落ちた目かづらと云ふ顔色。

「寂しいねえ。」

「あゝ．．．．」

「何時だねえ。」

「先刻二時うつたよ。眠く成つたの？」

「對手は忽ち元氣づいた聲を出して、

「何、眠いもんか．．．．．だけどもねえ、今時

分になると寂しいねえ。」

「其處に皆寢て居るもの．．．．」

と云つた。大きな戸棚、と云つても先組

代々、刻み着けて何時が代にも動かした事な

い、．．．．其の横の襖一重の納戸の内には、民

也と父の祖母とが寝て居た。

母は世を早うしたのである……

「常さんの許よりか寂しくはない。」

「何うして？」

「だつて、君の内はお邸だから、広い座敷を二つも三つも通らないと、母さんや何か寝て居る部屋へ行けないんだもの。此の間、君の許で、徹夜をした時は、僕は、そりや、寂しかった……」

「でもね、傍ン許は二階がないから」

「二階が寂しい？」

と民也は眞黒な天井を。……

常さんの目も、齊しく仰いで、冷く光つた。



「寂しいつて、別に何でもないぢやないの。」  
 と云つともものゝ、南方で、札をずつて、ごそ／＼  
 と火鉢に嚼着いて、ひつたりと寄合はす。

炭は黒いが、今しがた継いだばかりで、尉にも成  
 らず、火氣も立たない。其れよりも、徹夜の温習に、  
 何よりか書入れな夜半の茶漬で忘れられぬ、大福め  
 いた餡餅を焙つたなごりの、餅網が、侘しく破蓮の  
 形で疊に飛んだ。．．．御馳走は十二時と云ふ  
 と早や濟むんで、――一つは二人とも其がために  
 勇氣がないので、．．．

常さんは耳の白い頬を傾けて、民也の顔を覗くや  
 うにしなから、

「でも、誰も居ないんだもの．．．君の許の  
 二階は、廣いのに、がらんとして居る。．．．」  
 「病氣の時はね、お母さんが寝て居たんだよ。」

コツ／＼、炭を火箸で突いて見たつけ、はつと止

めて、目を一つ瞬いて、

「え、そして、亡くなつた時、矢張、二階。」

「うゝむ・・・違ふ。」

とかぶりを振つて、

「其處のね、奥・・・」

「小父さんの、寝て居る許かい。・・・ぢ

や可いや。」と莞爾した。

「弱蟲だなあ・・・」

「でも、小母さんは病氣の時寝て居たかつて、今は誰も居ないんぢやないか。」

と觀世掾が挫げた體に、元氣なく話は戻る・・・

・  
・

「常さんの許だつて、あの、廣い座敷が、風はすう／＼通つて、それで人つ子は居ませんよ。」

「それでも階下ばかりだもの。――二階は天井の上だらう、空に近いんだからね、高い所には何が居るか知れません。・・・」

「階下だつて・・・君の内でも、此の間、僕

が、あの空間を通つた時、吃驚したものがあつたぢやないか。」

「どんなものさ、」

「床の間に鎧が飾つてあつて、便所へ行く時に晃々光つた……わツて、然う云つたのを覚えて居ないかい。」

「膳病だね、……鎧は君、可恐いものが出たつて、あれを着て向つて行けるんだぜ、向つて、と氣勢つて肩を突構へ。」

「こんな、寂しい時の、可恐いものにはね、鎧なんか着たつて叶はないや……向つて行きや、消つ了ふんだもの……此から冬の中頃に成ると、軒の下へ近く来るつてさ、あの雪女郎見たいなもんだから、」

「然うかなあ、……雪女郎つて眞個にあるんだつてね。」

「勿論だつさ。」

「雨のぴしょ／＼降る時には、油舐坊主だのと、うふ買小借だのつて……あるだらう。」

「ある……」

「可厭いやだなあ。こんな、霰あられの降ふる晩ばんには何なんにも別べつにないだらうか。」

「町まちの中なかには何なんにもないとき。それでも、人ひとの行ゆかない山寺やまでらだの、峰みねの堂だうだの、額がくの繪ゑがね、霰あられがばら／＼と降ふる時とき、ばちくり瞬まばたきをするんだつて……」

「嘘うそを吐つく……」  
と其それでも常つねさんは瞬またきした。からりと廂ひさしを鳴ならしたのは、樋竹とひだけを、迂すへる、落おちたまりの霰あられらしい。

「うそなもんか、其それは眞暗まつくらな時とき……丁ちやうど今夜や見たやうな時ときなんだね。それから……雲くもの底そこにお月つき様が眞蒼まつさをに出て居ゐて、降ふる事ことがあるだらう……さう云いふ時ときは、八田はつた潟がたの鮒ふなが皆みな首くびを出だして打うたれるつて云いふんです。」

「痛いたからうなあ。」

「其處そこが化ばけるんだから、……皆みんな、兜かぶとを着きて居ゐるさうだよ。」

「ぢや、傍ほく許とこの蓮池はすいけの緋鯉ひこひなんか何どうするだら

うね？」

其處には小船も浮いへられる。が、穴のやうな  
眞暗な場末の裏町を抜けて、大川に架けた、近道の、  
ぐら／＼と揺れる一錢橋と云ふのを渡つて、土堀ば  
かりで家の疎な、畠も池も所々、侍町を幾曲り、で、  
突當りの松の樹の中の其の邸に行く、  
さんの家を思ふにも、恰も此の時、二更の鐘の音、

幽。

#### 四

町なかの此處も同じ、一軒家の思がある。  
民也は心も其の池へ、目も遙々と成つて恍惚しな  
がら、

「蒼い鎧を着るだらうと思ふ。」

「眞赤な緒へ。凄い月で、紫色に透通らうね。」

「其處へ玉のやうな霰が飛ぶんだ……」

「そして、八田瀉の鮎と戦をしたら、何方が勝

つ？……」

「然うだね、」

と眞顔に引込まれて、

「緋鯉は立派だから大將だらうが、鮎は雑兵でも

數が多いよ……瀉一杯なんだもの。」

「蛙は何方の味方をする。」

「君の池の？」

「あゝ、」

「そりや同じ所に住んでるから、緋鯉に屬ぐが當  
前だけれどもね、君が、よくお飯粒で、絲で釣上げ  
ちや投げるだらう。ブツと咽喉を膨らまして、くる  
りと目を圓くして腹を立つもの……鮎の味

方に成らうも知れない。」

「あ、又降るよ……」

凄まじい霰の音、八方から亂打つや、大屋根の石もから／＼と轉げさうで、雲の渦く影が入つて、洋燈の笠が暗く成つた。

「鞍摩の笛が聞えなくなつてから、三度目だね

え。

「矢が飛ぶ。」

「弾が走るんだね。」

「緋鯉と鮒とが戦ふんだよ。」

い瀉で……」

「葎を一寸開けて見ようか、」

と魅せられた體で、ト立たうとした。

民也は急に慌しく、

「お止し?……」

「でも、何だか暗い中で、ひら／＼眞黒なのに交つて、緋だか、紫だか、飛んで居さうで、面白いも

の、

「面白くはないよ……可恐いよ。」

「何故？」

「だつて、緋だの、紫だの、暗い中に、霰に交つて——それだと電がして居るやうなもの・・・其の節をこんな時に開けると、そりや可恐いぜ。」

「さあ・・・此から海が荒れるぞ、と云ふ前觸れに、廂よりか背の高い、大な海坊主が、海から出て来て、町の中を歩いて居てね・・・人が靦くと、蛇のやうに腰を曲げて、其の窓から睨返して、よくも見たな、よくも見たな、と云ふさうだから。」

「嘘だ！ 嘘ばつかり。」

「眞個だよ、霰だつて、半分は、其の海坊主が蹴上げて来る、波の二が交つてるんだとさ。」

「へえ？」

「と常さんは未だ腑に落ちないか、立掛けた膝を落さなかつた・・・」

霰は屋根を駈廻る。

民也は心に恐怖のある時、其の節を開けさしたくなかつた。



母がまだ存生の時だつた。……一夏、日の  
暮方から凄じい雷雨があつた。……雷光絶間な  
く、雨は車軸を流して、荒金の地の車は、轟きな  
ら奈落の底に沈むと思ふ。――雨宿りに駈込んだ  
知合の男が一人と、内中、此の店に居すくまつた。  
十時を過ぎた頃、一呼吸吐かせて、もの音は静まつ  
たが、裾を捲いて、雷神を乗せながら、赤黒に黄を  
交へた雲が虚空へ、舞ひノ上つて、昇る氣勢に、  
雨が、さあと小止みに成る。

其の喜びを告さむため、神棚に燈火を点じようと  
して立つた父が、其のまゝ色をかへて立竊んだ。

ひい、と泣いて雲に透る、……あはれに、  
悲しげな、何とも異様な聲が、人々の耳をも胸をも  
突貫いて響いたのである。

五

笛を吹く・・・と皆思つた。笛もある限り悲  
哀を籠めて、呼吸の續くだけ長く、且つ細く叫ぶら  
しい。

雷鳴に、殆ど聾ひなむとした人々の耳に、驚破や、  
天地一つの聲。

誰も其の聲の長さだけ、氣を閉ぢて呼吸を詰めた  
が、引く呼吸は其の聲の一度止むまでは續かなかつ  
た。

皆戦いた。

ヒイと尾を微かに、其の聲が切れた、と思ふと、  
雨がひたりと止んで、又二度めの聲が聞えた。

「鳥か。」

「否。」

「何だらうの。」

祖母と、父と、其の客と言を交はしたが、其の言葉も、晃々と、震へて動いて、目を遮る電光は隙間を射た。

「近い。」

「直き其處だ。」

と云ふ。叫ぶ聲は、確かに筋向ひの二階家の、軒下あたりと覺えた。

其が三聲めに成ると、泣くやうな、怨むやうな、呻吟くやうな、苦み跪くかと思ふ意味が明かに籠つて来て、新らしく又耳を劈く……

「見よう、」

年少くて屈竟な其の客は、身震ひして、すつくと立つて、内中で止めるのも肯かないで、タン、ド、ドン！ と其の、其處の扉を開けた。――

「何、」

と此處まで話した時、常さんは堅くなつて火鉢を掴むだ。

「其の時の事を思出すもの、外に何が居ようも知れない時、其の部を開けるのは。」

と民也は言ふ。

却説、大雷の後の希有なる悲鳴を聞いた夜、客が部を開けようとした時の人々の顔は・・・年月を長く経ても眼前見るやうな、いづれも石を以て刻みなした一如きものであつた。

部を上げると、格子戸を上へ切つた・・・其も鳴るか、簫の笛の如き形した窓のやうな隙間があつて、衝と電光に照される。

と思ふと、引緊めるやうな、柔かな母の兩の手が強く民也の背に掛つた。既に膝に乗つて、嚙着いて居た小兒は、其なり、薄青い襟を分けて、眞白な胸の中へ、頬も口も揉込むと、恍惚と成つて、最一度、ひよいと母親の腹の内へ安置され終んぬで、トもんどりを打つて手足を一つに縮めた處は、瀧を分

けて、すつんと別の國へ出た趣がある、……  
そして、透通る胸の、暖かな、鮮血の美しさ。眞紅  
の花の咲満ちた、雲の白い花園に、朗らかな月の映  
るよ、と其の浴衣の色を見たのであつた。

が、其の時までの可恐しさ。――

「常さん、今君が葎を開けて、何か覗いたつて、  
僕は潜込む懐中がないんだもの……」

簾の窓から覗いた客は、何も見えなかつた、と云  
ひながら、眞蒼に成つて居た。

其の夜から、筋向うの其の土藏附の二階家に、一  
人氣が違つた婦があつたのである。

寂寞と霰が止む。

民也は、ふと我に返つたやうに成つて、

「去年、母さんがなくなつたからね……」

火桶の面を背けると、机に降込んだ霰があつた。

ぢゆうと火の中にも溶けた音。

「勉強しようね、僕は父さんがないんだよ。さ

あ、  
」

鮎ふなが兜かぶとを着きると云いふ。 . . . .

「八田はつた潟がたの處ところを讚よまう。」

と常つねさんは机つくえの向むかうに居ゐ直なほつた。

洋燈ランブが、じい／＼と鳴なる。

其その時ときであつた。

二階の階子檀の一番上の一壇目．．．．．と思ふ處へ、欄間の柱を眞黒に、くつきりと空にして、袖を欄干摺れに．．．．．其の時は、濃いお納戸と、薄い茶と、左右に兩方、襖前を揃へて裾を踏みくゞむやうにして、圓鬚と島田の對丈に、面影白く、ふツと立つた、兩個の見も知らぬ婦人がある。

ト其の色も．．．．．薄いながら、判然と煤の中に、塵を拂つてくつきりと鮮麗な姿が、二人が机に向つた横手、疊數二疊ばかり隔てた處に、寒き夜なれば、ぴたり閉めた襖一枚．．．．．臺所へ續くだゞつ廣一枚敷との隔に成る．．．．．出入口の扉があつて、むしゃ／＼と巖の根に蘭を描いたが、年數質するに堪へず、で深山の色に燻ぼつた、引手の傍に、嬰兒の掌の形した、ふちのめくれた穴が開いた――其の穴から、件の板敷を、向うの反古張の古壁へ突當つて、ぎりゝと曲つて、直角に葎弱色の干乾び

た階子壇・・・十ばかり、遙かに穴の如くに高い其の眞上。

即ち襖の破目を透して、一つ突當つて、折屈つた上に、たとへば月の影に、一刷彩つた如く見えたのである。

トンと云ふ。

と思ふと、トン／＼トンと軽い柔かな音に連れて、褌が揺れ／＼、揃つた裳が、柳の二枝靡くやう・・・すら／＼と段を下りた。

肩を揃へて、雛の繪に見る・・・袖を左右から重ねた中に、どちらの手だらう、手燭か、臺か、裸火の蝋燭を捧げて居た。

蝋の火は白く燃えた。

胸のあたりに蒼味が射す。

頬のかゝり白々と、中にも、圓鬢に結つた其の細面の氣高く品の可い女性の、縫れた鬢の露ばかり、



面おも要やつれした横よこ顔がほを、瞬またきもしない雙さうの瞳ひとみに宿やどした途とた  
端んに、スーと下おりて、板いたの間まで、もの優やさしく肩かたが動うご  
くと、其その臘らふの火ひが、件くだんの繪ゑ襖すまの穴あなを覘のぞく・  
其その火ひが、洋らむ燈ぶの心しんの中なかへ、二せつと入はつて、一ひとつに成な  
つたやうだつた。

やあ！ 開あけると思おもふ。

「きやつ、」  
と叫さけんだ、友とも達たちが、前さきへ、背うしろの納なんど戸はねへ匆はね込んだ。  
口くちも利きけず・  
つて、父ちちの寢ねた枕まくら頭もへ突つ伏ぶした。

こゝの障しやう子じは、幼をさないものを夜よ度ふかしを守まもつて、寒さむい  
に一枚まい開あけたまゝ、霰あられの中なかにも、父ちちと祖そ母ぼの情なさけの夢ゆめ  
は、紙かみ一ひとへ重かさねの遮おほるさへなく、机つくえのありに通かよつたの  
であつた。

父ちちは夢ゆめだ、と云いつて笑わらつた、  
もに起おきて出いで、火ひ鉢ばちの上うへには、再ふたび芳かんばし香かをりが満みつ  
る、餅もち網あみががゝつたのである。

茶ちやの煮にえた時とき、眞ま夜よ中なかに又また霰あられが來きた。

後で、常さんと語合ふと・・・二人の見たのは、しかも其が、錦繪を板に合はせたやうに同一かつたのである。

此が、民也の、ともすれば、フト出逢ふ、二人の姿の最初であつた。

常さんの、三日ばかり學校を休んだのは然る事ながら、民也は、それが夢でなくとも、然まで可恐いとも可怪いとも思はぬ。

敢て思はぬ、と云ふではないが、恚うしたあやしみには、其の時分馴れて居た。

毎夜の如く、内井戸の釣瓶の、人手を借らず鳴つたのも聞く・・・

輓轆が軋んで、ギイと云ふと、キリノと二つばかり井戸繩の擦合ふ音して、少須して、トンと幽かに水に響く。

極つたやうに、其のあとを、ちよきノと細かに

まないた  
炬を刻む音、時雨の噴から尚は冴えて、ひとり寝の  
ともしび  
燈火を消した枕に通ふ。

續つづいて、臺所だいどころを、こと／＼と云いふ聲音あしおとがして、板いたの間まへ掛かる。――此この板いたの間まへ、其その時ときの二人ふたりの姿すがたは來きたのであるが――又また……實際じっさいより、寢ねて居あて思おもふ板いたの間まの廣ひろい事こと。

民也たみやは心こころに、此これを板いたの間まケ原はらだ、と稱となへた。

傳つたへ言いふ……孫右衛門まごゑもんと名なづけた氣きの可いい小父をぢさんが、獨酌どくしゃくの酔醒よひざめに、我わがねたを首くびあげて見みる寒さむさかな、と來山張らいざんはりの屏風びやうぶ越しに、魂消たまげた首くびを出だして覘のぞいたと聞きく。

臺所だいどころの豪傑がうけつばら、座敷方ざしきがたの僭上せんじやう、榮曜榮華えいえうえいぐわに憤いきどほりを發はつし、しゃ討うて、緋縮緬ひぢりめん小褌こつまの前まへを奪取はびとれとて、竈將かまどしやう軍ぐんが押取おつとつた柄杓ひしやくの采配さいはい、火吹竹ひふきだけの貝かひを吹ふいて、鍋なべ釜かまの鎧武者よろひむしやが、のん／＼のん／＼と押出おしだしたとある……板いたの間まケ原はらや、古戰場こせんぢやう。

襖一重ふすまひとへは一騎打きうちで、座敷方ざしきがたでは切所せつしよを防ふせいだ、其そ處この一段低いちだんひくいのも面白おもしろい。

ト其の氣で、頬杖をつく民也に取つては、寢床から見る其の板の間は、遙々としたものであつた。

登音は其處を通つて、一寸止んで、やがて、トン／＼と壇を上る、と高い空で、すらりと響く襖の開く音。

「あゝ、二階のお婆さんだ。」  
と、熟と耳を澄ますと、少時して、

「えゝん。」  
と云ふ咳。

「今度は二階のお爺さん。」  
此の二人は、母の父母で、同家に二階住居で、睦じく暮したが、民也のものを覚えて後、母に先だつて、前後して亡くなられた……

其の人たちを、こゝにあるものゝやうに、あらぬ登音を考へて、咳を聞く耳には、人氣勢ない二階から、手燭して、する／＼と壇を下りた二人の姿を、然まで可恐いとは思はなかつた。

却つて、日を経るに従つて、物語を聞きさした如く、床しく、可優しく、身に染みるやうに成つたのである。……

霰が降れば思が凝る。……

然うした折よ、もう時雨の噴から、其の二三年は約束のやうに、井戸の響、板の間の跽音、人なき二階の襖の開くのを聞馴れたが、婦の姿は、當時又多日の間見えなかつた。

白菊の咲く頃、大屋根へ出て、棟瓦をひらりと跨いで、高く、高く、雲の白きが、微に動いて、瑠璃色に澄渡つた空を仰ぐ時は、あの、夕立の夜を思出す……そして、美しく清らかな母の懐にある幼児の身にあこがれた。

此の屋根と相向つて、眞蒼な流を隔てた薄紫の山がある。

醫玉山。

頂<sup>いたゞき</sup>を虚空<sup>こくう</sup>に連<sup>つら</sup>ねて、雪<sup>ゆき</sup>の白銀<sup>しろかね</sup>の光<sup>ひかり</sup>を放<sup>はな</sup>つて、遮<sup>さへぎ</sup>る樹立<sup>こだち</sup>の影<sup>かげ</sup>もないのは、名<sup>な</sup>にし負<sup>お</sup>ふ白山<sup>はくさん</sup>である。

やゝ低<sup>ひく</sup>く、山<sup>やま</sup>の腰<sup>こし</sup>に其<sup>そ</sup>の流<sup>ながれ</sup>を繞<sup>めぐ</sup>らして、萌黄<sup>もえぎ</sup>まじりの朱<sup>しゆ</sup>の袖<sup>そで</sup>を、佛<sup>おもかげ</sup>の如<sup>ごと</sup>く宿<sup>やど</sup>したのは、つい、まのあたり近<sup>ちか</sup>い峰<sup>みね</sup>、向<sup>むかひ</sup>山<sup>やま</sup>と人<sup>ひと</sup>は呼<sup>よ</sup>ぶ。

其<sup>そ</sup>の裾<sup>すそ</sup>を長<sup>なが</sup>く曳<sup>ひ</sup>いた蔭<sup>かげ</sup>に、圓<sup>まる</sup>い姿<sup>すがた</sup>見<sup>み</sup>の如<sup>ごと</sup>く、八田<sup>はつたが</sup>潟<sup>た</sup>の波<sup>なみ</sup>、一<sup>ひと</sup>所<sup>ところ</sup>の水<sup>みづ</sup>が澄<sup>す</sup>む。

島<sup>しま</sup>かと思<sup>おも</sup>ふ白帆<sup>しらほ</sup>に離<sup>はな</sup>れて、山<sup>やま</sup>の端<sup>は</sup>の岬<sup>みさき</sup>の形<sup>かたち</sup>、につと出<sup>で</sup>た端<sup>はし</sup>に、鶴<sup>つる</sup>の背<sup>せ</sup>に、緑<sup>みどり</sup>の被衣<sup>かつぎ</sup>させた風情<sup>ふぜい</sup>の松<sup>まつ</sup>がある。

遙<sup>はる</sup>かに望<sup>のぞ</sup>んでも、其<sup>そ</sup>の枝<sup>えだ</sup>の下<sup>した</sup>は、一<sup>ひと</sup>筵<sup>むしろ</sup>、掃<sup>はき</sup>清<sup>きよ</sup>めたか、と塵<sup>ちり</sup>も留<sup>とど</sup>めぬ。

あゝ山<sup>やま</sup>の中<sup>なか</sup>に葬<sup>はうむ</sup>つた、母<sup>はは</sup>のおくつきは彼處<sup>かしこ</sup>に近い。其<sup>そ</sup>の松<sup>まつ</sup>の蔭<sup>かげ</sup>に、其<sup>そ</sup>の後<sup>のち</sup>、時々<sup>とき／＼</sup>二人<sup>ふたり</sup>して佇<sup>たゞす</sup>むやうに、民<sup>たみや</sup>也<sup>おも</sup>は思<sup>おも</sup>つた、が、母<sup>はは</sup>には然<sup>さ</sup>うした女<sup>をんな</sup>のつれはなかつたのである。

月<sup>つき</sup>の冴<sup>さ</sup>ゆる夜<sup>よ</sup>は、峰<sup>みね</sup>に向<sup>むか</sup>つた二階<sup>かい</sup>の縁<sup>えん</sup>の四枚<sup>よまい</sup>の障<sup>しや</sup>

子うじに、それか、あらぬか、松影射まつかげさしぬ・・・戸と  
袋ふくろかけて床とこの間へ。・・・また前まへに言いつた、も  
の凄すこい暗くらい夜よるも、年とし経へて、なつかしい人ひとを思おもへば、  
降積ふりつもる霰あられも、白菊しらぎく。

【完】